

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21401039

研究題目名（和文） トランスナショナル・コミュニティの地域間比較-境域アジアの移住と生活の動態研究

研究題目名（英文） A Comparative Study on the Transnational Communities among Regions: Dynamics of Emigrations and Lives in Peripheral Asia

研究代表者

松本 誠一 (MATSUMOTO SEIICHI)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：30181770

研究成果の概要（和文）：本研究では、東アジアと東南アジアそれぞれの境域における在地トランスナショナル・アクターの移動と生活実践に関するデータを収集し、同時に彼らの移動をめぐる社会ネットワークの形成・再編の様式をマイクロ・メゾ・マクロなレベルで比較検討することを試みた。その具体的事例に基づく考察では、移動生活を実践するための生態環境や、国家体制、国境の歴史の深淺が両境域間で明白に異なり、その差異がトランスナショナルな生活実践のあり方やその歴史的展開の違いとして現れていることが示された。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to examine and compare the dynamics of historical process in which the transnational communities have been formed or reorganized at the peripheries in East Asia and Southeast Asia. Based on data on migrations and social practices of the transnational actors, we attempted to show the characteristics of their social networks at micro, mezzo, and macro level. The case studies revealed that we may well contrast the patterns of (re)formation of the transnational communities in the two studied areas, when we understand the differences of ecological setting as well as historical meaning of nation-state between the two areas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2011年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	9,900,000	2,970,000	12,870,000

研究分野：人文学C

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：トランスナショナル・コミュニティ、東アジア、東南アジア、地域間比較、境域、人口移動、宗教、エスニシティ

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、グローバリゼーションやポスターレス社会と総称される地球規模での

人・物・情報の流動化にともない、東アジアおよび東南アジアでも、様々なレベルの組織や団体が急速にトランスナショナルな性格を帯びるようになった。注目されるのは、エスニシティや宗教を紐帯とする在地の（ローカルな）コミュニティでさえも、しばしば異なる国家に属する成員によって構成され、複数の国家に跨る関係を内包するようになっていることである。さらにそうした在地コミュニティのトランスナショナル化、国際的に行動するアクターは、国際交通網の発達した拠点都市のみならず、地理的政治的周縁においても顕著にみられるようになっている。

トランスナショナル・コミュニティに関する考察は、アジアの周縁世界における民族や宗教のダイナミクスを理解するうえで重要な学問的意味を持つようになっている。

また、従来、日本における文化人類学の地域的研究は当該地域内については研究者相互の研究交流が行われていたが、トランスナショナル化はその地域をも超えており、研究対象のそうした動きに合わせて研究主体の側も、地域研究集団間のボーダーレス化を進めることが求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、東アジアと東南アジアにおいて、その境域——主に国境地域に位置する地理的・政治的周縁——における、エスニシティ、宗教それぞれを紐帯とした在地のトランスナショナル・コミュニティの生成・再編過程ならびにその制度的背景を、これらの地域において国民国家の枠組みがほぼ現在のものになった1960年代から現在までの50年ほどの時間幅で比較考察することである。

文化人類学的な東アジア研究では、韓国・朝鮮研究と台湾研究はそれぞれ地域別に学会・研究会があり、その地域を超えた研究交流を促すこと。東南アジア研究では複数国に跨る、より広い地理空間を対象とする研究展開が実施されてきた。

東アジア研究と東南アジア研究を交差させることを通じて、それぞれの地域で確立してきた基礎的な用語・概念や方法は、東アジア境域および東南アジア境域というより広い視野の中で妥当性を有するか、もし妥当でなければ、それに代替するものが何であるかについて、理論的考察を行う。

3. 研究の方法

【個別研究】

研究期間は3年、主たる方法はフィールドワークと史資料調査である。具体的には、各メンバーは、①東アジアの境域としては、日韓境域（福岡・下関、韓国南岸）、日台境域（沖縄、台湾）、中台境域（中国沿海地区、台湾）を、②東南アジアの境域としては、フィリピン・ミンダナオ島南東岸、マレーシア・サバ州東岸、インドネシア・北スラウェシ州を調査地として、以下の三つの課題に関する調査を実施した。

(1) 〔制度的背景〕 国籍・市民権、住民登録、出入国管理に関する制度・政策とその変遷。

(2) 〔複数国家に跨るエスニック・コミュニティの生成・再編〕 成員の越境生活実践の展開、跨境ネットワークの形成、成員間でのエスニック／ナショナル・アイデンティティの再構築。

(3) 〔異なる国籍を持つ成員からなる宗教コミュニティの生成・再編〕 成員および指導者・知識人の越境宗教実践の展開、跨境ネットワークの形成、成員間での宗教的権威と秩序の再構築。

本研究は、これらの課題を明らかにし、さらに二つの境域間でのそれぞれの課題に関する異同を比較検討することにより、アジアの境域におけるトランスナショナル化を契機とした民族と宗教の動態について、その地域性ならびに普遍性を提示することを試みた。

【研究交流】

(1) 個別研究の成果を各メンバーが持ち寄り、毎年、研究フォーラムをもつ。この際に非メンバーである研究者の参加も勧誘することで、研究内容の普遍化に資するとともに、研究ネットワークの拡張をはかった。

(2) 本研究は東洋大学アジア文化研究所を研究拠点としているため、上記の研究フォーラム等は東洋大学で開催された。他方、松本や研究分担者は、調査対象国においても境域社会の動態に関するワークショップ等の研究集会を開催し、現地の研究者や知識人と調査の知見や研究成果に関する意見交換を行うよう努めた。

4. 研究成果

(1) 基本概念について

「transnational」の語は20世紀からの語で、当初は政治・経済・宗教などの国境を越えた拡張、拡張主義に対して用いられていたのが、近年はグローバル化の状況の中で、個人や家族の生活展開における動き（国境を跨いだ生活）に対して用いられるように変わってきていると言え、るようである〔松本

2011]。これまで多国籍企業や国際的 NGO、国際犯罪組織などは、トランスナショナルな行為者 (transnational actor) として対象視されてきたが、それ以外の、普通の家族・親族や宗教団体の中に、跨境生活者、跨境活動者が多く出現している。こういう人々には文化人類学や社会学の方法で接近するのが相応しい。こういう文脈で「跨境人」の語を使用し始めている。

transnational family の例は、フィリピンの事例がいち早く研究報告されているが、われわれの対象とした、アジアの他の地域でも、国際的な交通・通信手段の発達・普及により、国境を跨いで機能する、「修正核家族」(modified nuclear family) や、小規模な家族経営事業・宗教活動なども活発化している事例を見い出している。また、こうした国際的往来層の中も、比較的富裕な層と貧困層とに階層化が見られる。

(2) 研究方法

トランスナショナル・アクターを対象とする研究方法をいろいろ試してみた。移動的な対象を研究者がフィールドワークにより把握する方法は、従来の静態的コミュニティ調査を基本としながらも、そのコミュニティに住んでいない他出メンバーについても、対象化する努力が必要となる。移動経験者への聴取、移動アクターの移動に研究者が同行して観察する方法 (国際移動に研究費で同行するのは難点がある) や、移動経路の途中に待ち構える方法 (偶然性に左右される欠点が多い) などの応用も過去の研究になくはない。日本における文化人類学的な移民研究史の中で泉靖一・蒲生正男などの、母社会と海外移民地の両社会を対象とする研究方法は、政策により為された集団的移民を選定していたが、今日の TA は個々に移動するものが多い点で、対象選定の経緯が異なって来る。GPS を利用した機器を移動者に持ってもらい、移動経路を追跡するという方法も可能になっている (研究倫理面の問題がある)。

(3) 海上交通環境条件の比較

東アジアはモンスーン地帯で、その海上交通は強い風の影響を受ける。黒潮など潮流の影響もあり、たとえば日韓境域は黒潮分流が対馬に向かうが、対馬の南北の海峡で流路が狭められて潮流はいちだんと速くなる。暴風雨でなくとも、非動力船では渡海は容易・安全とは言えない。それに比して、東南アジア南はモンスーン地帯から外れ、マレーシア・フィリピン・インドネシアに挟まれた海域は、台風発生海域より南にあり、そこの「海民」サマ・バジャウの知識人によると、嵐は年間ほとんどなく、静かな海であるという。

(4) 国境史の比較

東アジア境域中、日韓境域については、遅くとも古代には辺境警備のための防人が置かれ、その後、中央統制の弱化した時代もあったが、国境線が陸地の外れに在るか、沖合海上に在るかの観念はともかく、国境の歴史は古い。

日本が台湾・朝鮮などを植民地化した期間、「帝国」の範域は一時期広まったが、日中戦争・太平洋戦争の後、縮小した。この植民地期を挟む時期の影響を受けている生活史を聞きとる場合は、対象とする時代は、当初想定していた「最近 50 年間」という期間より、古く遡って聞く必要がある。

日本-韓国、日本 (沖縄)-台湾、台湾-中国の間の国境史、現代の出入国管理の歴史はそれぞれ異なり、一概には言えないが、密航・密輸は厳しく取り締まる対象である。

一方、東南アジア境域中の対象 3 国については、欧米の植民地時代が長く、第二次大戦後にそれぞれ独立した。現代の国民国家の歴史も比較的浅く、サマ・バジャウ人にとっては生活海域に国境線が引かれたという経緯がある。彼らにとって国境は「緩い」もので、移動の障壁にはなっていない。

(5) 研究集会

研究フォーラムとして、初年度に東南アジア境域を、2 年次に東アジア境域を、3 年次に東アジア境域と東南アジア境域を比較することを、それぞれ課題として主催し、その成果を白山人類学研究会『白山人類学』誌各号に特集として掲載し、公開した。

① 「特集：東南アジア海域世界の社会史再考——サマ・バジャウ人の視点から (英文)」『白山人類学』第 13 号、2010 年 3 月発行

② 「特集：台湾をめぐる境域」『白山人類学』第 14 号、2011 年 3 月発行

③ 「特集：跨境コミュニティにおけるアイデンティティの持続と再編——東アジアと東南アジアからの展望」『白山人類学』第 15 号、2012 年 3 月発行

日韓境域において、松本および研究協力者の井出弘毅・宮下良子は、釜山と下関で現地研究者とのワークショップ「日韓境域の人と文化」を開催した。釜山ではドンア (東亜) 大学校 (2011 年 8 月 25 日)、下関では東亜大学東アジア文化研究所 (2011 年 8 月 27 日) を会場に、東洋大学アジア文化研究所との共催の形であったが、現地研究者との意見交換を通じて有意義な時間を持った。

これ以外に、他研究計画と連携してメンバーが参加した研究集会は多数ある。

(6) フィールドワーク

【東アジア】

①2009年度

日韓境域：松本・井出弘毅が韓国・巨済島等における、内外韓国人の移住と生活史に関する調査。

日台境域：松本・植野と研究協力者・山本須美子が台湾・花蓮市における八重山諸島—台湾間の戦後期の人口移動と、そのネットワークの観光資源化に関する調査。

中台境域：後藤が台湾および香港における祭祀公業の越境的展開に関する調査。

②2010年度

日韓境域：松本が韓国南岸島嶼を拠点とする韓国人の域外移住ネットワークと生活史に関する調査。

日台境域：植野・渡邊（連携研究者）が台湾・沖縄間における第二次大戦前後期の越境移動ネットワークの持続性に関する調査。

中台境域：後藤が台湾における祭祀公業の越境的展開に関する調査。

③2011年度

日韓境域：松本が福岡・下関、佐世保、韓国南岸・巨済島を調査。

日台境域：植野が台湾東北岸、沖縄を調査。

中台境域：後藤は台北、広州・深圳で「兩岸関係法」の運用に関する調査を行なった。

【東南アジア】

①2009年度

長津はマレーシア・サバ州における跨境ムスリムコミュニティの再編とアイデンティティの動態に関する調査。

渡邊（連携研究者）はフィリピン・マニラにおけるムスリムの近隣諸国と中東諸国への越境移動に関する資料調査。

②2010年度

長津はインドネシア・東南スラウェシ州などを拠点とする海民の越境漁業の展開、ならびにイスラーム知識人の国際ネットワークの在地社会への接合に関する調査。

青山（連携研究者）はフィリピン・ダバオ市のサマ人集落における越境的宗教実践の展開と社会的不平等の拡大に関する調査。

赤嶺（連携研究者）は、国内において、環境NGOによる国際的海洋資源管理とその国際ネットワークの展開に関する資料調査をおこなった。

③2011年度

長津は、マレーシア・サバ州国境域、半島部スランゴ州の移民コミュニティを東南アジアの境域として取りあげ、宗教や民族のネットワーク、あるいは自然資源利用を通じて形成されたトランスナショナル・コミュニティの動態に関する調査成果をまとめた。

青山（連携研究者）はフィリピン・ダバオ市のサマ人集落において、主観的意識に基づく不平等観調査を実施した。

(7) 今後の研究課題

次（「5.」）に示すように研究成果の報告は活発に行ってきたが、(6)のように多岐にわたり展開したフィールドワーク・デスクワーク等を通じて、多数収集した民族誌的資料・文献資料・電子データ中に未整理なもの、異なる活用が期待されるもの等々が残っており、この語の研究展開の中で活用していきたい。

国際的に活動する企業に対して、国連ではグローバル・コンパクトをまとめ、「10原則」を打ち出したが、「跨境人」として新しいコスモポリタニズムのありようはどのようなものをモデルとしうるか。国境を超えた広がりの中での市民論、multicultural manner 論などでの議論も参照しながら、多様なアジアの事例を把握していくことを重要と考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 18 件）

①長津一史、「海民」の生成過程——インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として、『白山人類学』15号、2012、45-71、査読有

②渡邊暁子、マニラにおけるサマ人両替商の歴史的過程、『白山人類学』15号、2012、111-121、査読無

③松本誠一、「台湾韓人研究ノート」、『白山人類学』14号、2011、103-132、査読有

④松本誠一、transnational ノート、『東洋大学アジア文化研究所研究年報』45号、2011、19-24、査読無

⑤植野弘子、父系社会を生きる娘——台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって、『文化人類学』75巻4号、2011、526-550、査読有

⑥渡邊暁子、マニラにおけるフィリピン・ムスリムの婚姻実践とマリッジスケープ、『地域研究』10巻1号、2010、110-131、査読有

⑦Aoyama Waka, Neighbors to the 'Poor' Bajau: An Oral Story of a Woman of the Cebuano Speaking Group in Davao City, the Philippines, *Hakusan Review of Anthropology*, 13, 2010, 3-33, 査読有

⑧青山和佳、開発援助の現場における解釈コミュニティの出現——フィリピン・ダバオ市のバジャウ集落を事例に、『アジア研究』55巻4号（2009）、55-75、査読有

〔学会発表〕（計 32 件）

- ① Watanabe Akiko, “Narrowing the Communication Gap in Pre-departure Programmes: A Case of Filipino Household Service Workers to the “Middle East,” International Workshop on “The Making of Gulf Migration: From Macro and Micro Perspectives,” March 8, 2012, Qatar University (Doha, Qatar).
- ② 松本誠一 「日韓境域研究の時代区分と『跨境人』のタイプについて」、東亜大学東アジア文化研究所・東洋大学アジア文化研究所共催ワークショップ「日韓境域の人と文化」、2011年8月27日、東亜大学（下関市）
- ③ 長津一史 「マレーシア・サバ州の跨境社会における開発の政治過程——サマ人の自己表象に着目して」、東南アジア学会第85回研究大会、2011年6月12日、北海道大学（札幌市）
- ④ 青山和佳、「開発援助の現場におけるサマのアイデンティティ再構築——フィリピン・ダバオ市の事例から」、東南アジア学会第85回研究大会、2011年6月12日、北海道大学（札幌市）
- ⑤ 植野弘子、台湾におけるライフヒストリー研究の課題——文化人類学的手法から、台湾オーラルヒストリー科研費研究会第11回研究会、2011年2月27日、東京女子大学（東京）
- ⑥ Nagatsu Kazufumi, On Maritime Frontier: A Socio-Ecological Setting and Identity of the Sea Folks in Wallacea, “The 7th Kyoto University Southeast Asia Forum: Politics, Livelihood and Local Praxis in the Era of Decentralization in Indonesia,” January 8, 2011, Hasanuddin University (Makassar, Indonesia).
- ⑦ 植野弘子 「台湾漢人社会的殖民主義與対『日本』的認識——従日本人類学研究来看」、台北研究会、2010年12月28日、中央研究院民族学研究所（台北市）
- ⑧ Akamine Jun, Sea cucumber markets in the worlds: Hong Kong, Guangzhou and New York, “ACIAR-SPC Asia-Pacific Tropical Sea Cucumber Aquaculture Symposium,” February 17, 2010, SPC (Noumea, New Caledonia).
- ⑨ 渡邊暁子、フィリピン＝中東間における国際労働力移動の展開——リクルーターの役割に焦点をおいて、アジア文化研究所第4回年次集会、2010年1月23日、東洋大学（東京）
- ⑩ Watanabe Akiko, Exploiters or Benefactors? Two Faces of Private Recruiters’ Socio-economic Roles, “6th International Convention of Asia Scholars (ICAS),” August 6, 2009, Chungnam National University (Daejeon, Korea).

〔図書〕（計13件）

- ① 植野弘子・三尾裕子編著『台湾における<植民地>経験——日本認識の生成・変容・断絶』、風響社、2011、347p.
- ② 長津一史・加藤剛編著『開発の社会史——東南アジアにみるジェンダー・マイノリティ・越境の動態』、風響社、2010、540p.
- ③ 青山和佳・受田宏之・小林誉明編著『開発援助がつくる社会生活——現場からのプロジェクト診断』、大学教育出版、2010、228p.
- ④ 後藤武秀 『台湾法の歴史と思想』、法律文化社、2009、181 p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 誠一 (MATSUMOTO SEIICHI)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：30181770

(2) 研究分担者

長津 一史 (NAGATSU KAZUFUMI)
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：20324676

植野 弘子 (UENO HIROKO)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：40183016

後藤 武秀 (GOTO TAKEHIDE)
東洋大学・法学部・教授
研究者番号：90186891

(3) 連携研究者

青山 和佳 (AOYAMA WAKA)
北海道大学・メディアコミュニケーション
研究院・准教授
研究者番号：90334218

赤嶺 淳 (AKAMINE JUN)
名古屋市立大学・人文社会学部・准教授
研究者番号：90336701

渡邊 暁子 (WATANABE AKIKO)
東洋大学・社会学部・助教
研究者番号：70553684